



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	非「定型化」発達論の存在論的基盤 : まとめにかえて
Author(s)	宮崎, 隆志
Citation	子ども発達臨床研究, 6, 91-95
Issue Date	2014-12-05
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.6.91
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57580
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12203623_06_91-95.pdf



総括コメント論文

非「定型化」発達論の存在論的基盤

— まとめにかえて —

宮 崎 隆 志*

Ontological base of the development theory not for typifying

— As a reflective remark —

Takashi MIYAZAKI

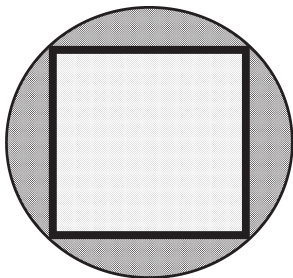
1. 「定型・逸脱・是正」の発達論批判

今回のシンポジウムに先立って、私たちは二つの総合研究企画を開催した。第一回目(2011年)のテーマは「遊ぶ・学ぶ・働く」で、人間の活動の諸側面に焦点を当てつつ、社会的排除に帰結する活動次元の転倒性を検討した。第二回目(2012年)は「生きづらさを超えて」をテーマとし、その転倒性を超える実践の論理を探究した。

それらのシンポジウムの準備と総括の過程で度々使われたのが、下のモデルである。この図の四角形は「定型」化された人間像を意味し、その周辺のグレーゾーンは、社会的に排除された人々を意味している。社会が定型化の度合いを強めれ

ば強めるほど、四角形の境界線は厚くなり、グレーゾーンも明瞭に現れるようになる。私たちに求められているのは、このグレーゾーンに陥った人々を四角の枠内に再統合することではなく、この境界線を撤廃することであろう。

しかし、このモデルに基づけば、「発達」とは四角形の十全な一員となることであり、「支援」とは四角形から逸脱しそうになる人々や逸脱した人々を枠内に戻すことであり、さらに四角形の中心に押し進めることである、という理解も生まれる。その理解からすれば、四角形の境界線が厚くなればなるほど、当事者は無力になるので支援者に求められる「専門性」も高くなる。グローバル化時代に生きる教師も、エンプロイヤビリティを高める若者支援者も、発達障害に治療的に関わる支援者も、同様の文脈に置かれている。D.ショーンが批判する「技術的合理性」が専門性の内実となるのはこのような状況の故であろう。当事者の生きづらさも、支援者の困惑も、このような社会状況の下で発生しているとすれば、その両者を批判的・統一的に解決する理論的実践の展望が描かれる必要がある。私たちは、その理論的方向性を「発



*北海道大学大学院教育学研究院

達支援学」と呼ぶことにした。もちろん、それはまだ方向性を示すものに過ぎず、内実を創り上げるのは今後の課題であるが、今回のシンポジウムはそれに向けたささやかな挑戦である。

2. 生物学的視点による「発達」の相対化

このような関心から今回のシンポジウムを振り返ると、私たちの議論を進めるためのいくつかの課題が見出せたように思う。第一は、既存の発達や支援概念を相対化する視点を据えることである。各発表に共通していたのは、生物学的視点の重要性である。川田や加藤は、年齢段階区分に基づく発達論の人為性と社会的規定性を指摘しているが、それはそのような規定性を取り除いた次元での発達論の成立可能性を前提にしている。室橋が脳の構造として言及した生物学的な基盤も、そのような視点からの理論化を試みるものであろうし、水野が示した進化論的な視点もここに含めてよいであろう。これらの議論は先のモデル図を相対化する視座を与えている。次の図は、進化という視点を加味した補助線を先の図に加えたものであるが(横軸は時間、縦軸は進化)、これは、定型・逸脱・是正という議論の枠組みが、特殊な歴史的阶段において成り立つものであることを示している。水野の問い、すなわち「体力低下現象は退行なのか」という問いに対しても、特殊な歴史段階において特定の社会的な規定性が作用することによって退行的現象も生ずるが、その矛盾が新たな進化の起動力になると回答することができるかもしれない。間宮が「停滞 depression というのは発達の支援の契機」というのも同じ文脈に位置づけ

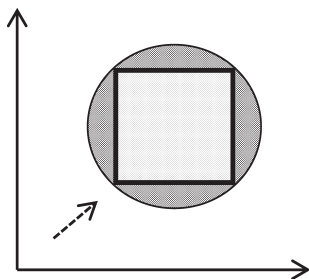
られるであろう。つまり、生物進化の過程でみれば、その時々にとる特殊な形態に内在する矛盾が進化の原動力になる。

生物学的視点は進化という視点のみならず、成長・成熟という視点も含むが、いずれにしても、このような視点からの「発達」概念の相対化により根底的な次元(＝生物学的次元)からの再規定は、生命を教育学の基本カテゴリーとして措定しようとする大田堯の試み¹にも通底すると思われる。さらには、1960年代末から70年代にかけて登場した反精神医学・反発達論・管理教育批判²の課題意識とも共鳴する試みと言えるであろう。

3. 歴史的生態学的視点

しかし、生物学的視点は現代の特殊な発達概念を相対化する意義はあるものの、それだけでは新たな発達論は生みだせない。他の哺乳類との比較研究や脳の構造や機能の解明は、私たちに多大な知的刺激を与えてくれるものの、教育学はその対象である人間の固有性に基づいてそれらの知見を位置づけなければならないからである。但し、ここから先は、論者によって見解の分かれるところであろう。そもそも人間の固有性とは何であり、経済学とも法学とも異なる教育学におけるその把握の特質をどのように理解するのかは、そう簡単な問題ではない。その意味では、以下は今回のシンポジウムを経た私見である。

個体的能力把握への批判は状況的学習論の広がりとともに一般的に見られるようになった。脱文脈的で抽象化された個人はタブラサとして把握されがちであるし、支援実践モデルとしては欠損(Deficit)モデルすなわち救済のモデルに容易に接続する。今回のシンポジウムではそのようなアプローチを批判しつつ、生態学的な個人把握の必要性が改めて強調された。川田は「異年齢期発達カップリング」として、異年齢の者同士が互いに補い合って成立する活動に着目する必要性と可能性を指摘し、その活動の中で生成する「関係的な力学」に着目すべきだと主張した。石岡は開発



主義を、dwelling・「住み込む」ことによって自己と対象、あるいは主体と環境との間に出来上がる歴史化された意味を剝奪することとして規定し、その意味の剝奪が新たな社会問題を生むことを指摘している。間宮は二者関係に基づく支援モデルではなく、日常性に立脚した第三者が関与する支援モデルの重要性を指摘し、その意義を「人間と自然の持てる力を共同の営みによって引き出す」こととして整理している。真壁・南方を一体化して把握する宮崎の提起も含めて、これらは共同存在としての人間の本質理解の必要性を主張するものであり、他者や自然との不断の相互作用の下にある自己・個人という生態学的な実体が諸個人を個体化する特殊歴史的な社会的規定の背後に存在することを主張している。

同時に、それらの論者は単に生態学的相互関連を言うのではなく、活動の契機を重視している点に留意する必要がある。つまり、他者・自然との相互作用は人間の能動性の発揮としての何等かの活動によって規定されている。つまり関係は活動から生ずるのであり、自由な意識に媒介された活動であることによって意味が生成する。また、この点に関わって石岡が歴史的な意味と述べている点も重要である。生態学的視点はともすれば空間的にのみ理解されがちであるが、そこには必ず人間の歴史がある。桑子敏雄は「空間の履歴」と表現しているが³、空間が歴史性を持つのは人間が活動を通して意味ある空間を形成するからであり、そこには活動の産物が次世代にとっての道具として蓄積されているからである。ヘーゲルやマルクスが指摘したように主体は消えても道具が残ることによって、時間を越えた対話としての歴史が可能になる。

このように見れば、私たちは、活動の主体としての人間像を基底に据えて、その現実的な存在構造を把握することを志向していると言ってよいであろう。ここでいう活動はイリイチの言うところの「パナキュラー」な性格を持つものであり、真壁仁が方言に着目したこともこの点と関わっている。自然と対話し、他者とともに意味づける主体

の活動の中で生まれてきた言葉が方言である。自立的に展開する社会システムに埋め込まれた標準語は、システム管理の必要性から生まれ機能分化していくが、真壁によればそれは開発主義に彩られた言葉であった。

4. 境界線上の社会システム批判

活動から関係が生まれると述べたが、その関係を媒介として、人間は規範を生成させ、社会制度をつくり、そして自己を形成する。この関連は人間存在の本質的な特質であろう。しかし、近代社会においてはそれが転倒的にしか実現しない。先に言及した反精神医学・反発達論が登場した1970年代には、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』（邦訳1974年）や石牟礼道子の『苦海浄土』（1972年）などの衝撃的な出版が相次いだ。それは貧しさからの解放を正義として膨張してきた近代社会、しかも二度の大戦を経て近代理性に関する深刻な反省をしたはずの近代社会に内在する犯罪性を暴露するものであった。今日のフクシマに繋がる問いは既に明示的であった。

発達概念に引き寄せれば、人間が自らを線引きし、種々の理由によって「望ましくない者」を巧妙に規定することに内在する暴力性が批判されるのは必然的であったというべきであろう。しかし、そこから反転し、「本来の姿」をどこかに探し求めることによって近代社会の転倒性から逃れようとするならば、ユートピア論に留まってしまう。70年代はそのような反対の極への振動も現れた時代であった。求められているのは、人間の本質が転倒的にしか実現しないという矛盾した現実内に在しつつ発達を語ることである。今回のシンポジウムに即するなら、先にあげた生物学的視点や歴史的生態学的視点によって相対化された近代発達論を単に糾弾の対象として放逐するのではなく、それらの視点を方法的な道具とすることによって近代発達論に内在する矛盾を明らかにし、排除しあう両極の統一論理の変動条件を解明することが課題になる。

加藤は青年期の発達を考える際に、いかに変化させるかではなく、「ほっておくと変化してしまうもの」が停滞させられるという意味での「停滞」が主題になると指摘した。「停滞する時期に何が起きているのかをきちんと記述しなければいけない」という提起は、青年期を社会的に設定された矛盾した時期としてとらえ、その矛盾の中で何が起きているのかを明らかにすることに課題を設定するという研究構想として受け止めてよいであろう。このような視点が「転倒的発達」の研究には求められるように思われる。「転倒というのをもっと精密に見て」（石岡）いくことと言ってもよい。

そのように考えれば、最初に示したモデル図の中にあった四角形の境界線が重要な意味を持つてくる。この境界線は限界線と言い換えてもよい。限界とは連続性が不連続に転換する局面であり、連続性と不連続性が同時に存在するという矛盾が頂点に達する場である。この境界線上で展開する活動に作用する力学を読み解き、そこに生きる人々の生の意味の変遷を内在的にたどることが発達研究には求められる。総合研究企画「生きづらさを超えて」の基調提案において、栗原彬氏は「深い声を聴く」ことを課題として提起された。境界線上の矛盾に徹底して内在することによって聴きだされた「深い声」に基づく社会システム批判（＝自明の社会システムの有限性を明らかにすること）が、転倒的発達論の解放への唯一の回路であろう。

5. 発達支援学の可能性

1960年代末から70年代の近代批判は一種の「革命」であった（ハーバーマス）。しかし、1980年代以後の新自由主義に基づく「反革命」は、総体性の把握を断念し、実効性ある処方を「エビデンス」の名の下に探究するという実証主義を復権させつつある。グローバリゼーションを所与とする思考は大学にも蔓延し、競争的環境の下で求められる効率的な社会システムの構築に役立つ成果を産出することに研究上の価値が置かれるように

なった。

技術的な知の意義は認めなければならないが、同時に実証主義が新たな科学主義を生み出し、人々の生の価値を診断するような事態が生ずることになれば、再度、科学主義批判としての「反発達論」が現れることは必然的であろう。既に私たちは、2011年3月11日に、科学主義に基づく安全神話の崩壊を経験している。科学主義化した教育学は定型の境界線を厚くすることによって、あの人災に勝るとも劣らぬ被害を人々にもたらすかもしれない。

このシンポジウムを企画した子ども発達臨床研究センターのメンバーは、教育学がそのような過ちを再度、或いは再再度犯すことを何としても避けなければならないと考えている。教育学研究院に属していても、個々の研究者の研究領域は多様であり、またそれぞれの領域に固有の課題も山積しており、教育学への責任の所在は必ずしも明確ではない。但し、それは道徳的な理由からではない。私見ではあるが、教育学はその生誕期とは異なり、個別的に分化した諸研究のメタレベルに位置し、具体的な領域に即した研究の進展に伴って展開するものかもしれないが、個別研究の進行過程上の過程について明示化され、共有されることはあまりない。しかし、その次元は同時に個別研究のメタフレームをも形成しているのであり、その自覚的な構成なしに、個別研究の質的転換は生じないはずである。

「発達支援学」はそのような次元を対象化する試みでもある。今回のシンポジウムでは専門が異なる研究者が、異質性を意識しつつ development 概念を媒介項として出会った。異質な者がつながる時に浮上するのは相互に潜んでいた共通性である。相互に他者を鏡にしつつ、己を見ることによって、他者を尺度にした自己を対象化することができる。小論もシンポジウムを通して浮かび上がった異質性の下での共通性を言葉にしようとしたものであるが、このような試みを継続することによって、個別領域の研究では暗黙化されていた教育学の総体性が浮かびあがるのではなかろうか。

文 献

- ¹ 例えば、大田堯『大田堯自撰集成 1 生きることは学ぶこと』藤原書店、2013 年。
- ² 例えば、R. D. レインの一連の著作、山下恒男の『反発達

- 論 抑圧の人間学からの解放論』現代書館、1977 年、持田栄一『「生涯教育論」批判』明治図書出版、1976 年など。
- ³ 桑子敏雄『空間の履歴』東信堂、2009 年